

# 道徳授業でのさらなる ICT機器活用のために

## 1. 道徳科の学習指導におけるICT機器活用の必要性

GIGAスクール構想が実現したことによって、全国の小・中学生が一人一台の端末を携えて授業に臨むという光景が日常となってきた。先生がたは試行錯誤しながらも、さまざまなアプリケーションを実際の授業の中で活用してきてはいる。

だが、先生がたの中で、ICT機器をさらに活用していこうとする人と、そうではない人とで温度差が生じてきているのではないだろうか。また、ICT機器の活用法に関しても、特定のアプリケーションだけを特定の使用方法によって活用するという「マンネリ化」も起こってきているのではなかろうか。

こうした問題にこたえるためには、国がなぜこの時期に全国の小・中学生に一人一台の端末を配布したのか、その理由を改めて考えておく必要がある。その理由を端的に述べるならば、日常の授業の中でICT機器を活用することは、以前から世界では既に常識となっていたけれども、日本ではそうはなっていないかったということである。日本はようやくスタートラインに着いたばかりなのである。

## 2. 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

GIGAスクール構想が進行中であった令和3（2021）年1月に中央教育審議会は、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）を取りまとめた。

答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両面が強調されている。

「個別最適な学び」とは、端的にいえば、教師の視点で従来からも問われてきた「個に応じた指導」（「指導の個別化」と「学習の個性化」）を学習者の視点から整理し直した概念である。ここで重要なことは、これからの教師には、学習者自身が自らの学習状況を把握し、学習を調整することができるよう促していくことが求められるということである。そのためには、学習履歴（スタディ・ログ）などのデータを蓄積するとともに、これを分析し、利活用していくことが必要となる。

一方、「協働的な学び」とは、これまでの「日本型学校教育」で重視されてきた探究的な学習や体験活動などを通じ、「多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り

手となることができるよう」に、必要な資質・能力を育成するための学びである。

ただし、答申では、ICTの活用と「協働的な学び」は相反するものではなく、ICTを活用することによって、「協働的な学び」を発展させることができるとしている。その際に重要なことは、①「共同作成・編集機能の活用」、②「子ども相互の意見の共有」というICT機器が得意とする機能を活用することである。

ICT機器の活用は、「令和の日本型学校教育」を実現するためには、必須なのである。

## 3. ICT機器の効果的な活用

では、どのようにICT機器を活用していけばよいのであろうか。

その前に、まずもっておさえておきたい点は、ICT機器の活用は目的ではなく、あくまでも手段であるということである。

通常、先生がたは道徳科の授業を行うにあたっては、その授業のねらいを設定するはずであり、そのねらいを達成するために、より効果的・効率的な方法を考えるはずである。もし、ICT機器を活用したほうがより効果的・効率的だとするならば、ICT機器を積極的に活用すればよいのではなかろうか。

また、1時間の授業全てにおいてICT機器を使用しなければならないということではない。授業の「導入」「展開」「終末」のどの場面で、どのように使用し、授業の流れにどのようにつなげていくかについて、考えていく必要もあるであろう。

具体例として、教師の発問に対する自分の考えをロイロ・ノートやGoogle Classroomを使って提出させる場面を考えてみよう。先生がたは、タイピングで入力させて提出させるであろうか。それとも、ノートに書いた自分の考えを写真に撮らせて提出させるであろうか。提出後は、プロジェクターやモニターで提示するであろうか。それとも、一人一人が閲覧できるようにするであろうか。さらに、閲覧させるだけでなく、友達の意見に返信させるように促すであろうか。

このように、実際の授業を想定して、ICT機器をなんのためにどのように活用しながら、どのような授業を展開していくのかを、具体的に考えていく必要があるのである。

本冊子では、各学年で一教材ずつ、ICT機器を活用した道徳科の指導案例を掲載している。本冊子が道徳科授業でのICT機器の活用の一助になれば幸いである。